

創作ダンス指導における教師の省察に関する質的研究－熟練教師の「行為の中の省察」に焦点を当てて－

福武幸世（新見公立大学）

太田一枝（岡山市立上道中学校）

酒向治子（岡山大学）

ダンス指導は、変化し続ける授業の流れの中で、適切なタイミングでの声掛けや演示をするなど、教師の身体的介入が授業の成否に強く影響を与える領域とされる。熟練教師は、授業の場面に応じた、学習者への積極的な働きかけを行うが、その暗黙知である実践知の多くは言語化されずにいる。教師のダンス指導不安を払拭するためにも、熟練教師の実践知を概念として明示化することが求められている。

本研究は、公立中学校で長年ダンス教育に携わってきた熟練教師 O 氏のダンス指導を事例に挙げ、D・ショーンが提唱した「行為の中の省察(reflection in action)」という観点から、O 氏の実践的指導力の特徴を深層のかつ探索的に検討し、その特徴を明らかにすることを目的とする。分析手法には、再生刺激法を採用した聞き取り調査を行い、M-GTA による質的検討を行った。

「行為の中の省察」に着目し、O 氏の実践を分析した結果、5つのコアカテゴリー【教師観】【中学生のダンスへの抵抗感】【即時的な指導】【ダンスの指導観】【指導中の困難感】と、12のサブカテゴリー〈理想〉〈使命感〉〈個々への指導〉〈個人の特性の見取り〉〈全体への指導〉〈内面の見取り〉〈身体の見取り〉〈空間の見取り〉〈対人距離の見取り〉〈活動の進捗の見取り〉〈授業の方向性〉〈ダンスのねらい〉と、45の概念が認められた。また、カテゴリー間の関係性を図式化した結果、仮説モデルが構築された。熟練教師である O 氏のダンス指導は、【教師観】【中学生のダンスへの抵抗感】を土台とし、基底的な教師像と生徒像を基に行っていることが浮き彫りとなった。そして、O 氏の指導行為は一人ひとりを大切にしたい集団づくりが核となっていることが推察された。特に授業中に行われる【即時的な指導】の展開は、O 氏の長年培われた【ダンスの指導観】があり、O 氏の授業理念となっている。しかしながら、O 氏の指導には、【指導中の困難感】がみられた。

本研究では、O 氏の授業実践中の様々な省察を通して、自己関係性を内包する「みとり能力」や、教師自身の身体を介入させ、一人ひとりを大切にしたい集団づくりを核とした実践的指導力の特徴が明らかとなった。一方で、O 氏の省察からは、自主創造性教育の理想と規律・規範遵守との狭間で葛藤が生じていることも浮き彫りとなった。